

洋16-121

「淵に立つ」★★★★

2016（平成28）年8月23日鑑賞<ビジュアルアーツ大阪試写室>

監督・脚本・編集：深田晃司

八坂草太郎（殺人罪で服役していた男）／浅野忠信

鈴岡利雄（金属加工工場を営む男）／古口寛治

鈴岡章江（利雄の妻）／筒井真理子

山上孝司（新人の従業員）／太賀

設楽篤（退職する従業員）／三浦貴大

鈴岡蛸（利雄と章江の10歳の娘）／篠川桃音

鈴岡蛸（8年後の蛸）／真広佳奈

2016年・日本、フランス映画・119分

配給／エレファントハウス、カルチャヴィル

<カンヌで、「ある視点」部門審査員賞を受賞！>

第23回東京国際映画祭「日本映画・ある視点」部門作品賞を受賞した『歓待』（10年）（『シネマルーム27』160頁参照）を観て、そのすばらしさにビックリした時から大いに注目していた深田晃司監督は、その後、私の大好きな二階堂ふみを主演させた『ほとりの朔子』（13年）でナント三大陸映画祭グランプリ他を受賞（『シネマルーム32』115頁参照）。その後の『さようなら』（15年）は私にはイマイチだった（『シネマルーム37』未掲載）が、ついに本作で第69回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門審査員賞を受賞した。1980年生まれの若き才能、深田晃司監督が、カンヌ常連の黒澤清監督、是枝裕和監督さらには河瀬直美監督らと肩を並べたわけだ。

カンヌでのこの受賞には、前年に第68回カンヌ国際映画祭の「ある視点」部門で日本人初の監督賞を受賞した黒澤清監督の『岸辺の旅』（15年）（『シネマルーム37』247頁参照）に主演した国際派俳優・浅野忠信の出演が効いているのかもしれないが、私には深田晃司監督作品の常連で、本作でも『歓待』と同じような町工場の主人公・鈴岡利雄を演じた俳優・古舘寛治と、これも『歓待』と同じように、ふいにそこに闖入してくる、刑務所を出たばかりの男・八坂草太郎を演じた浅野忠信との「掛け合い」がいかに展開していくのかが興味深い。

他方、前半は敬虔なプロテスタントとして10歳の一人娘・鈴岡蛸（篠川桃音）を守りながら利雄の仕事を献身的に支える妻・章江を演じ、8年後の後半は、前半とはがらりと変わり、大きな心の闇を抱える中で娘連れでの自殺を図る妻を演じる筒井真理子は、私の全然知らなかった女優。もっと美人のビッグネームを起用してほしいと思う反面、プレスシートを読むと、彼女は松尾スズキ監督作品の『クワイエットルームにようこそ』（07年）（『シネマルーム16』442頁参照）、北野武監督作品の『アキレスと亀』（08年）（『シネマルーム21』286頁参照）、園子温監督作品の『希望の国』（12年）（『シネマルーム29』37頁参照）（16年）等にも起用されている、舞台もOK、映画もOKの芸達者らしい。私は本作を観てはじめてこの筒井真理子という女優のすごさを知ったが、本作では出番の少ない浅野忠信の演技より、筒井真理子の演技の方がよく効いてカンヌ国際映画祭の「ある視点」部門審査員賞を受賞したのかも・・・。

<邦題の意味は？英題の意味は？世界展開は？>

私の大好きな女優でプロデューサー、そして映画監督である杉野希妃は、師匠の韓国監督キム・ギドクと同じように、「早く、安く、いい作品を！」を実践している。そのうえ、最初から国内だけではなく世界展開を考えて映画をつくっているから、近時の『欲動（TAKSU）』（14年）（『シネマルーム35』193頁参照）や『禁忌（sala）』（14年）（『シネマルーム35』198頁参照）では英題をつけたり、英語の字幕までつけている。本作も最初から世界に向けて発信すべく、河瀬直美監督の『あん』（15年）や黒澤清監督の『岸辺の旅』、諏訪敦彦監督の『不完全なふたり』（05年）（『シネマルーム15』233頁参照）などを手掛けたフランス映画製作会社COMME DES CINEMASと共同制作を行い、ポストプロダクションはすべてフランスで敢行したらしい。その結果、完成直後から、各国より上映のオファーが相次いでいるらしい。

他方、本作の邦題『淵に立つ』とは、どういう意味？その理解は日本人でも難しいが、プレスシートの中で深田晃司監督は師匠である平田オリザの言葉を引用しながら「この映画もまた、観客とともに崖の淵に立ち、人間の心の奥底の暗闇をじっと凝視するような作品になって欲しいと願い、『淵に立つ』というオリジナルタイトルになりました。」と語っている。これは、平田から「人間を描くということは、崖の淵に立って暗闇を覗き込むような行為だと。闇に目をこらすためには少しでも崖の際に立たないといけなく、しかし自分自身が闇の中に落ちてしまっただけで元も子もない。」と聞かされたことが下敷きになっているらしい。なるほど、なるほど・・・。

また、この邦題を英題にすると『Harmonium』になったらいいが、これはオルガンのこと。ワールドセールスの担当者に他のタイトル案をいくつか出してもらい、その中からHarmoniumを選んだそう。その点について深田晃司監督は「ハーモニー（調和）を連想させる言葉でもあり、不調和を描くこの映画にふさわしいと思いついています。」と語っているが、この英題は私にはかなり違和感がある。さて、イギリス人はそのタイトルをどう理解？またフランス人は？

<変な夫婦と、変な閨入者、その展開は？>

2015年10月から12月にかけては、阿部寛主演の『下町ロケット』がTBS系の日曜劇場で全10回で放送され、大きな話題を呼んだ。そこでは前向きで感動的なドラマがくり広げられ、東大阪の町工場の宣伝に大いに役立った。しかし、本作に見る利雄（古舘寛治）のような超零細、家族経営の町工場は主人の頑張りや妻の支えで細々とやっているだけだから、その経営基盤なんてものもの。それでも、一応10歳の一人娘・蛸には高い月謝を払ってオルガンを習わせているから、一応は教育熱心な家族かも。

しかし、家族3人揃っての朝食の食べ方や昼間の仕事のやり方を見ていると、やはりこの家族はヘン。夫婦間の会話がないのは、我が家を含めて日本ではむしろそれが普通かもしれないが、鈴岡夫婦の会話のなさはあまりにも極端だ。まして、妻に何の相談もないまま、夕方章江（筒井真理子）が帰ってくると、夫の旧友だという男、八坂草太郎（浅野忠信）が働いているというのは、どう考えてもヘン。更にその日の晩には、空いてる部屋に八坂がしばらく寝泊まりすることになったが、そんな大事なことも章江に相談なく決めるほど利雄は亭主閑白なの？普通は利雄、章江間の夫婦ゲンカになり、それが八坂にも聞かれ、八坂はいたたまれなくなって飛び出してしまふ。そんな展開になるところだが、本作前半の60分で描かれる、変な夫婦と変な閨入者がくり広げる、意外な展開とは？

<前半の結末にビックリ！この閨入者は一体何を？>

近時の邦画はテレビドラマと同じようなわかりやすいものが多いが、カンヌの「ある視点」部門で審査員賞を受賞した本作は、河瀬直美監督の『殯の森』（07年）と同じように極めてわかりにくい。プロテスタントを信仰する章江に理解を示したばかりか、娘の蛸にも優しく、そのうえオルガンの指導にも意外な能力を発揮した八坂が、予想に反して章江と蛸に受け入れられたのは当然だが、しょせん八坂は刑務所帰りの男。また、そんな八坂を雇い入れ同居させたのは、利雄が八坂に対して何らかの負い目があるためであることは明らかだから、用心が肝要だ。同じ屋根の下で生活していても、家族と部外者（閨入者）はあくまで別だから、一緒に川遊びに行ったりしていかにも仲良くしても、どのように「線引き」するかが大切だ。

ところが、本作前半を観ていると、利雄は黙々と仕事に精を出すばかりで、八坂が章江と蛸の中にどのように入り込んでいるのかについては、至って無関心なようだが、これはどう見てもヘン。もちろん、同じ屋根の下で生活している従業員と妻が仲良くすることは悪いことではないが、ひょっとして二人が男と女の関係になればヤバイのでは？本作前半ではそんなヤバイシーンが再三登場し、今にも一線を越えそうになるが、さてその展開は？

しかして、オルガンの発表会の前日、章江が作ってくれた発表会用の赤いドレスを着たまま外に遊びに行った蛸が帰ってこないため、心配して捜しに行ってみると、そこで利雄と章江がみた蛸の惨状とは？その後、八坂は一体どこへ消えてしまったの？

<後半の新たな登場人物に注目！>

プレスシートの中で、「『淵に立つ』はこれまでの深田監督作品の中でも最もダークな心理スリラーと捉えることができます。作るときにそのことは意識していましたか？」との質問に対して、深田晃司監督は「特別にスリラーだとは考えていません。」と答えている。本作は近時のテレビドラマとは正反対に、あえてわかりにくく作っている（？）ことはまちがいない。それは奇をてらったためではなく、まさに人間の感情や欲望そのものがそれほどわかりにくいから。さらに、人によってそのあり方が大きく違っているため、監督がスクリーン上でその「統一見解」を示すべきではなく、観客一人一人の感覚や解釈に委ねるべきだと考えているためだ。そのため、八坂と章江の浮気（不倫）の現場も、スクリーン上ではある一線までしか見せず、その後は描かれない。しかし、物語の後半で利雄と章江が交わすセリフでは、利雄は自分の妻が八坂と寝ていることは百も承知であることを前提としているから、アレレ・・・。

本作は前半と後半で様相を全く異にしているが、後半でビックリするのは、8年後の車イスに乗った蛸の姿。これを真広佳奈が熱演しているが、その演技はさぞ大変だったことだろう。また、本作後半には工場を辞めていく古株の従業員、設楽篤（三浦貴大）に代わって、母親を亡くしたばかりの若者、山上孝司（太賀）が入社してくるが、山上の父親が山上も一度も見たことがない八坂だったことが山上の口から利雄に語られると、そこには何ともすごい空気が流れ、その後何ともすごい物語が展開していくことになる。本作についてはこれ以上のネタバレはできないが、本作後半では8年後の蛸の姿と新入社員の山上に注目！

<八坂らしき男を発見！4人でそこに向かったが・・・>

『海よりもまだ深く』（16年）で阿部寛が演じた興信所の男はえらく頼りなかったが、『後妻業の女』（16年）で永瀬正敏が演じた興信所の男は、元刑事だけにかなりしたたかだった。本作でも、後半の冒頭には、利雄に対して定期報告をくり返している興信所の男が登場するが、これって章江が言うように、「金食い虫」に過ぎないのでは・・・。だって、「調査中、調査中」と言って金をむしるばかりで、何の成果も報告できていないのだから。

ところが、設楽の代わりに利雄の工場で勤め始めた山上が、少しずつ鈴岡夫婦の信頼を得ていく中で、山上の口から「あっ」と驚く事実が披露された後、この興信所の男からもはじめて「まともらしい報告」がもたらされたから、利雄は俄然それに注目。もちろん、今更八坂を見つけても、8年前の蛸に対する八坂の「犯罪行為」（？）が判明するかどうかはわからないが、八坂と対面し問い詰めれば何らかの真相が判明し、納得感が得られるのでは。利雄の考えは多分そんなところだろうが、章江の方は、同行させている山上に対して、「八坂を発見すればあんたを殺す」と言い、山上は、それに対して「いいすよ、殺されても」と返すから、その会話は怖い。女が怖いことはよくわかるが、山上のその言葉は本心？それとも・・・？

<ネタバレ厳禁！！あつと驚く結末はあなた自身の目で>

今は18歳になっている蛸を同行させたのは24時間その世話が必要なためだが、長旅の中でその世話が負担になるのは当然。しかして、興信所の男から預かった写真と聴き覚えのあるオルガンの曲を頼りに、ある町のある家に近づいてみると、そこには8年前と同じように白いワイシャツを着た八坂そっくりの男の後ろ姿が。八坂は今でも8年前と同じように、オルガンに向かって座っている女の子にオルガンを教えているの？しかして、その後の展開は・・・？

これ以上書いてネタバレをバラしてしまうのは厳禁だから、中途半端ながら本作の評論はここで打ち切りたい。そして、その後の「あつ」と驚く展開は、あなた自身の目でしっかりと！しかし、家族って一体ナニ？10歳の蛸を中心にそれなりに幸せそうだった鈴岡夫婦は、八坂という一人の閨入者のためにここまでボロボロにされてしまったが、その「怒り」をどこへ持っていけばいいの・・・？

去る7月11日に観た『怒り』（16年）もすごい映画で、東宝系の大作だから大ヒットまちがいなしだろうが、本作に見る、どこへも行き場のない「怒り」もしっかり味わいたいものだ。